専門医症例報告

顎義歯とエピテーゼを装着した 1 症例

津田 賢治

A Case Report of Maxillofacial Prosthesis

Kenji Tsuda

抄 録

症例の概要：患者は 77 歳の男性。腫瘍により上顎骨の半側，眼窩底を含む右側頬骨および，右眼球を摘出されている。

治療計画と経過：安定感のある上顎顎義歯および，審美的な回復のための眼窩部エピテーゼの作製を治療計画として，上顎顎義歯を作製し，続いて顔面印象，ワックスアップ，シリコンへの置換および着色・仕上げの工程を経て，眼窩部エピテーゼを完成した。

考察：上顎顎義歯は，中空型とすることで安定性が確保された。眼窩部エピテーゼは審美的には患者の満足が得られたが，着脱が容易でないなど問題は残った。

結論：症例毎に臨床条件の差が大きい顎顔面補綴症例においては，それぞれに適した処置が重要である。

和文キーワード

顎顔面補綴，顎義歯，エピテーゼ

ABSTRACT

Patient: A 77-year-old male patient who was undergone hemi-maxillectomy including removal of the zygomatic bone, orbit and eyeball on his right side due to cancer. His chief complaint was to gain the stable orbital prosthesis at the first examination. The fabrication of an upper complete denture, a lower removal partial denture and an orbital prosthesis were planned for functional and esthetic rehabilitation. At first, intra-oral prostheses were fabricated, then, an orbital prosthesis was completed through the facial impression, sculpture, transfer the silicone material and coloration as following the conventional method.

Discussion: It was confirmed that the oral function was improved with the hollow obturator on the upper jaw, while some problems for the orbital prosthesis such as the difficulty in daily handling have remained.

Conclusion: In fabrication of maxillofacial prostheses, every clinical steps should be carefully done depending on rather complicated clinical conditions of individual patient.

Key words

maxillofacial prosthetics, denture for defected jaw, facial prosthesis

I. 緒 言

腫瘍や外傷に因り、顎顔面領域の一部に欠損が生じた症例において、顎顔面補綴治療は外科的再建処置に順じて、臨床的に重要な対処法である。上顎に欠損が生じた場合、無歯顎症例では総義歯型の顎義歯が作製されるが、咀嚼機能の回復のためには、機能時における顎義歯の維持・安定を図らなければならない。一般に全部床義歯は義歯床と顎提粘膜との間に生じる陰圧による吸着力や解剖学的な顎提形態によって維持を得ているとされるが、上顎欠損症例では、これらの要件が満たされないことが多い。また、顎欠損部においては、当然のことながら咬合力を負担する支持組織が存在しない。これらのことが、顎義歯による機能回復を困難にしている。

また、顔面に欠損が生じた場合、エピテーゼが作製される。エピテーゼは審美的改善に限れば、外科的再建に勝る場合も多いとされるが、その設計が欠損部形状や可動状態に大きく左右されることや、適合性、色調、および形態の回復など多くのことを考慮して作製する必要がある。

本症例においては、上顎骨の半側、眼窩底を含む右側頬骨および右眼球を摘出しており、比較的大きな欠損への補綴処置として、上顎顎義歯と眼窩部エピテーゼを作製した。

II. 症例の概要

77 歳 男性 大正 14 年 6 月 29 日生 初診日 平成 14 年 9 月 9 日

患者は昭和 19 年に右眼窩部良性腫瘍を初発したが、昭和 36 年右眼球を含む眼窩部切除、続いて平成 12 年、右上顎洞癌を発症し、同部の切除術および左大腿部よりグラフト手術、頭蓋底部切除および頭蓋骨再建、更には平成 13 年右上顎癌、鼻部癌切除と手術を繰り返し、最終的には、上顎骨の半側を切除、更に、右眼窩底を含む右側頬骨および右眼球の摘出を受けている (図 1)。したがって、右眼窩部から口腔内が直視できるという状況であった。患者は初診時、下顎に両側遊離端義歯を装着し、上顎にはわずかに上顎欠損部への立ち上がりが付与された全部床義歯を装着していた。この上顎全部床義歯は、平成 12 年の右上顎洞癌の手術直後に作製されたもので、当時は開口量が 1 cm 以下と開口障害が強かったため、人工歯の排列を一部低位にするといった工夫もなされたものであり (図 2)、そこから流動食を注入していた。しかし、続く平成 13 年の右上顎癌および鼻部

図 1 Frontal facial view at the first examination
患者初診時

図 2 Previous prostheses
旧義歯

癌切除により、義歯の不適合が起こり、開口時などに簡単に脱離する状態となったため、食事や会話など日常生活において不都合を生じていた。

また、欠損部である右眼窩周辺を常にガーゼにて覆う必要があり、同部の審美的な回復を望んでいた。

右側上顎骨半側欠損、右眼窩部欠損の診断の下に、食事や会話などの機能改善を目的とした安定感のある上顎顎義歯、下顎部分床義歯および顔面欠損部における審美的な回復のための眼窩部エピテーゼの作製を行うこととした。

図3 Final prostheses
新義歯

III. 治療内容と経過

1. 顎義歯

治療計画に従い、旧義歯の調整および残存歯の充填などの補綴前処置を行った後、上顎顎義歯および下顎部分床義歯の作製を開始した。この時点では、切歯部の開口量は3cm程あったので、通法に従い概形印象採得、個人トレーを用いた精密印象採得、咬合採得を行い、さらに、𪚩義歯試適時には患側の沈み込みを考慮した咬座印象を行った。

また、下顎の偏位や義歯の安定を考慮した結果、健側人工臼歯は交叉咬合排列とした。

平成14年12月25日、下顎部分床義歯および上顎顎義歯を装着した(図3)。当初作製した上顎顎義歯は天蓋開放型とした。患者の上顎骨欠損部は口腔内から顔面欠損部へと大きく交通していたため、上顎顎義歯は全部床義歯型であったが、本来維持力として期待すべき陰圧による吸着はないに等しいものであった。そのため、オブチュレータ部と欠損部との適合に苦慮し、削除調整とリラインを繰り返す必要があった。平成15年4月4日、上顎顎義歯が落ち着いたところで、顎義歯の天蓋開放部分に浸出液がたまるとの訴えもあり、顎義歯は中空型に改造した。

図4 Facial impression
顔面印象

図5 Final facial impression
精密印象

2. エピテーゼ

顔面の概形模型を作製する目的で顔面印象を行い^{1,2)}(図4)、模型上でエピテーゼ印象用のオストロントレーを作製し、精密印象採得を行った(図5)。作業用模型上でワックスアップを行い(図6)、数回の試適・修正の後、ワックスアップを完成した。続いて、エピテーゼの材料であるシリコン樹脂のベースとキャタリストを指定された10:1の重量比で混合し、内部色素染料を混ぜてベース色を決定した。埋没・流𪚩された鋳型に気泡を巻き込まないように混合したシリコンを入れ、80°Cのお湯に5分間浸漬し、加硫による成形を行った(図7)。義眼は既製の物を使用した。

加硫を終えたエピテーゼにシリコンアドヒーズブとエチレンに溶いた顔料を用いて外部着色を行う工程においては、チェアサイドで患者の皮膚色に適合させるように行っていたが、なかなか満足が得られず、4回の来院

図6 Wax sculpture
ワックスアップ

図7 Flasking and vulcanization
シリコンの加硫化

が必要であった。続いて仕上げの工程を経て、眼窩部エピテーゼを完成した (図8)。

IV. 考 察

上顎顎義歯は、装着時は天蓋開放型としたが、浸出液がたまるとの訴えがあり、中空型の顎義歯に改造することで結果的に安定感が増したが、大型化により着脱は若干難しくなった。また、浸出液が溜まらないので、快適で臭いが無い等の利点が見られたが、浸出液は鼻孔から出るか、口腔内に流入するため、鼻腔からの鼻汁と混ざった浸出液がたくさん出ることや、口腔内が変な味がする等欠点の訴えもあった。

上顎顎義歯は、その後、2度のリベースを行った。

眼窩エピテーゼは、審美的に患者の満足は得られたが、軟性素材で作られており、同じく軟組織である顔面表皮に装着する際、想定した位置が確認し辛く、僅かに位置や角度がずれただけで違和感が大きかった。特に患者一人で上手に装着するのは困難であるなど問題は残った。

V. 結 論

本症例報告は比較的大きな上顎欠損と眼窩部欠損に対して、中空型の上顎顎義歯と眼窩エピテーゼを作製したものである。症例毎に臨床様相の違いの大きい顎顔面補綴症例においては、患者の欠損状態を把握し、それぞれの症例に適した処置を的確に選択することが重要である。

図8 Extrinsic coloring and completed facial prosthesis
エピテーゼの着色・完成

文 献

- 1) 田中貴信, 岸本康男. われわれの顎顔面補綴治療. Dental Diamond 1983; 8(10): 24-30.
- 2) Tanaka Y, Gold HO, Pruzansky S. New facial impression technique in maxillofacial. Maxillofacial Prosthetics 1979; 2: 11-14.

著者連絡先: 津田 賢治

〒464-8651 名古屋市千種区末盛通 2-11

TEL: 052-759-2152

FAX: 052-759-2152

E-mail: nakahana-shika@infoseek.jp